

第18回 ちゅうでん教育振興助成（平成30年度）

報告書資料 一般 - 08

学校名・団体名	春日部市立粕壁小学校
コース	学校支援
活動・研究のテーマ	積極的にコミュニケーションを図る児童の育成

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1 研究の内容

本校の英語学習は、毎朝9分間の「E-タイム」と週1回45分間（1・2学年は隔週1回）の「E-タイムL」の二つのタイプの指導時間から成り立っている。「E」は“Enjoy” “English” “Everyday” の「三つのE」を意味している。毎朝9分間の「E-タイム」は、課題スキットの自作DVDを視聴させる時間とリズムやイントネーションをまねて話をさせる練習の時間とで構成されている。毎日同じスキットをシャワーのように耳にし基本的な言い回しや英語の音を身につけていくという、英語をインプットする時間として位置づけている。

一方、「E-タイムL」は、「E-タイム」で学習し習得した英語表現をゲームや模擬体験を通じて活用する時間である。これらの学習指導を通して学習意欲の向上を図るとともに、児童が英語を使う楽しさを実感できるようにしている。子ども達は担任の指導のもとに、ALT等と一緒にアクティビティを行う。授業では、担任も英語で説明や指示をし、子ども達も自分達が使える英語を使って友達やALTと会話をし、そして、自分の思いや考えを友達に伝える活動を1時間の中で必ず設定し、コミュニケーションを図ろうとする態度が身につくように指導している。インプットの「E-タイム」に対し、英語をアウトプットする時間として位置づけている。

指導内容・指導方法

（1）読みたくなる、書きたくなる場の設定

児童が自然に読みたくなる、書きたくなるためには、文字にふれる機会を多くすることが重要だと考える。そこで、本校では、カードに絵とともに文字も入れ、児童が自然に英語にふれる機会を増やし、「読みたい」「書きたい」という気持ちを高めている。また掲示物などでも児童が英語を学べるよう工夫している。中・高学年では、E-タイムLで行うゲームなどの一連の流れの中で、文字を読んだり書いたりできるように努めている。

（2）E-タイムW（第1水曜日を除く水曜日のE-タイムに設定。「W」は「Wednesday」「Writing」の「W」）

4年生以上は、第2～第4水曜日のE-タイムの時間に「読む」「書く」学習指導を行っている。アルファベットソングなど文字に関連する歌を歌った後、アルファベットの文字認識や語順の違いに気づかせる学習指導などを通して、文字に慣れ親しむ時間として位置づけている。4・5年生は、アルファベットの大文字小文字を全て4線に正確に書くこと、6年生は単語を正しく書き写すことを目標にしている。また1～3年生でも4年生からの学習に繋ぐため、E-タイムやE-タイムLの指導の中で、アルファベットに触れさせていく。いずれにしても、授業の自然な流れの中で、十分に慣れ親しんだ単語からの文字を「読む」「書く」ことに留意している。

今年度の研究仮説と手立て

仮説1 自分の思いや考えを話す学習活動を取り入れることで、英語での言い方を理解すると同時に、自分の考えや気持ちを伝える力が育つであろう。 **【話すこと】**

（手立て）

- ①児童が関心をもつ会話を含む Greeting や、児童が英語で話してみたい単語や言い回しについて児童相互で考えを深め合ったり、ALT や HRT に尋ねたりする Power up Time、ALT や粕小英語ボランティアとの Talking Time など、授業での Activity は勿論、様々な場面で、児童に「思いを伝える手段」としての英語を体感させ、Small Talk の充実を図る。
- ②スキットを繰り返し練習することにより取得させることで、児童が安心して話すことができるようにする。
- ③スキットを活用した必然性のある話す活動を取り入れることで、児童が自分の思いを表現できるようにする。
- ④5W1H や補充語句をインプットさせることで、児童がモデルスキットや既習内容を使って自分の思いや考えを表現できるようにする。

仮説 2 文字にふれる場面を多く設定し、定期的に英語を読んだり書いたりする学習活動を行うことで、コミュニケーションに活用できる「読む力」「書く力」が育つであろう。【仮説 2】

(手立て)

- ①授業で使用するカードに絵と文字を入れ、児童が自然に文字にふれられる機会を多くする。
- ②英語の掲示物を児童が実際に触ったり、文字を書き込んだりできるものにする事で文字にふれる機会を増やす。
- ③授業の流れの中で「読む」「書く」活動を設定することで、「読む」「書く」活動に必然性・必要感をもたせる。
- ④E-タイムWについては各学年の発達段階に応じた「活動・評価計画一覧表」を作成し、E-タイムWの系統的な指導方法の確立に迫る。

2 児童への効果

低学年

- ・体を動かしながら歌やゲーム、会話をする事で意欲が高まり、理解も深まった。また、児童が理解しやすい身近な場面を想定した内容の学習活動を多く取り入れることにより、日常生活の中でも英語でのあいさつやスキットを使っている姿が見られるようになった。【仮説 1】
- ・「ジェスチャー」「リピート」で、意思の疎通を確かめながら会話を楽しむことができた。【仮説 1】
- ・絵カードや絵本でアルファベットに触れさせることが「読む」「書く」ことへの興味に繋がった。【仮説 2】

中学年

- ・E-タイムにおいて、会話や語句を繰り返し練習することで、E-タイムLでの活動に抵抗なく取り組んだり、児童が自信をもって活動したりすることができた。アウトプットの時間がE-タイムLで十分に確保されているため、児童が自分の考えや気持ちを伝える時間の充実につながっていた。【仮説 1】
- ・場面設定を工夫することが、必然性必要感のある会話、即興の会話を引き出すことにつながった。【仮説 1】
- ・ストーリータイムを行うことにより、聞く態度が育ち、児童の語彙が増えたり、自分の考えや気持ちを話すことができたりすることにつながった。【仮説 1】
- ・興味・関心が高められるよう学習内容を工夫することで、児童が文字を読んだり書いたりすることへの抵抗感をもつことなく、楽しく文字指導が進められた。【仮説 2】

高学年

- ・他教科や授業外との関連を図った活動で、英会話への関心が高まり、自分のことを話す必要感が生まれ、より児童の意欲を高めることができた。【仮説 1】
- ・形容詞の意味を理解し、積極的に使おうとする意識が高まった。もっと話したかった英語、わからなかった英語の共有も、主体的な学習につながっていった。【仮説 1】
- ・Small Talk を工夫したことで、自然に英語学習に取り組む雰囲気作りができた。【仮説 1】
- ・「音・意味・形」をつなげて理解し、単語を読むことができるようになった。【仮説 2】
- ・アルファベットの集まりが文字になることを理解することができた。【仮説 2】

特別支援学級

- ・他教科との関連を図ったことにより、英語学習への意欲、さらには他教科への意欲も高まった。【仮説 1】
- ・あいさつあとの何気ない会話 (Small Talk) が、どのような内容であるのか推測したり考えたりする活動を日々繰り返すことで、児童の間こうとする意欲、聞き取る力が高まった。【仮説 1】
- ・授業で使用するカードに絵と文字を入れ、児童が自然に文字にふれられる機会を多くすることで、児童が文字の特徴に着目するようになった。【仮説 2】

3 全体としての成果

- ・授業の自然な流れの中で、話す必然性・必要感をもたせながら、その月のスキットや既習の英語を使って自分の思いや考えをくり返し話す場面を取り入れることで、児童のコミュニケーション能力が高まった。また毎年3学期に行っている「話す」についての実態調査を、今年度は毎月の授業に即した調査に変更したことで、児童が自らの力をふり返り次年度に生かすための一助となる内容となった。【仮説 1】
- ・児童が関心をもつ会話を含めた「Greeting」や、児童が英語で話してみたい単語や言い回しについて相互に考えを深め合ったりALTやHRTに尋ねたりするPower up Time、ALTや粕小英語ボランティアとのTalking Timeなど、授業でのActivityは勿論、様々な場面で、児童に「思いを伝える手段としての英語」を体感させ、Small Talkの充実を図ることができた。【仮説 1】
- ・「聞く」「話す」活動を充実させる中でも、授業の教材や掲示物などで1年生から毎日英語の文字に触れさせることにより、高学年になるにつれ文字への興味・関心が高まった。またE-タイムWで文字を読んだり書いたりすることで、さらに児童の英語への理解が深まり、文字への興味・関心、知識が高まった。【仮説 2】
- ・E-タイムWについては各学年の発達段階に応じた「活動・評価計画一覧表」を作成し系統的な指導方法の確立に迫ることができた。その結果、児童の「読む」「書く」ことへの意欲の高まりも見られた。【仮説 2】